

日置荘遺跡(その3)現地説明会資料

昭和62年10月31日

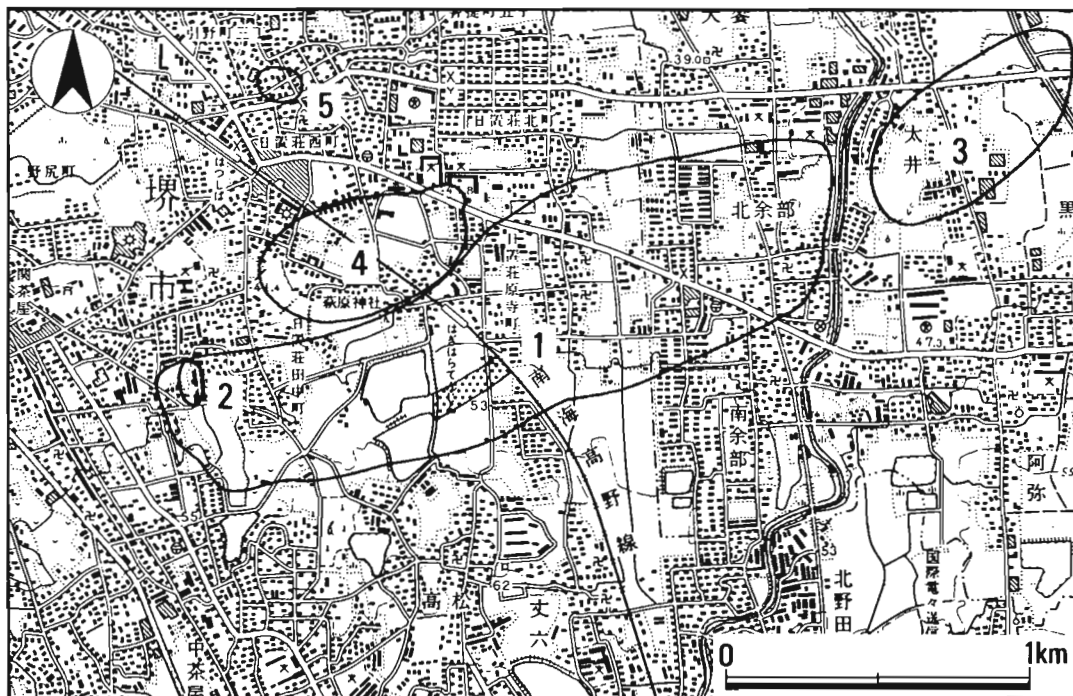
大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

はじめに

大阪府教育委員会と(財)大阪文化財センターでは、近畿自動車道と歌山線の建設に伴って本年4月から南河内郡美原町北余部から堺市日置荘西町にかけて所在する日置荘遺跡の発掘調査をおこなっています。そのうち、今回報告します(その3)調査区は遺跡のほぼ中央部にあたります。

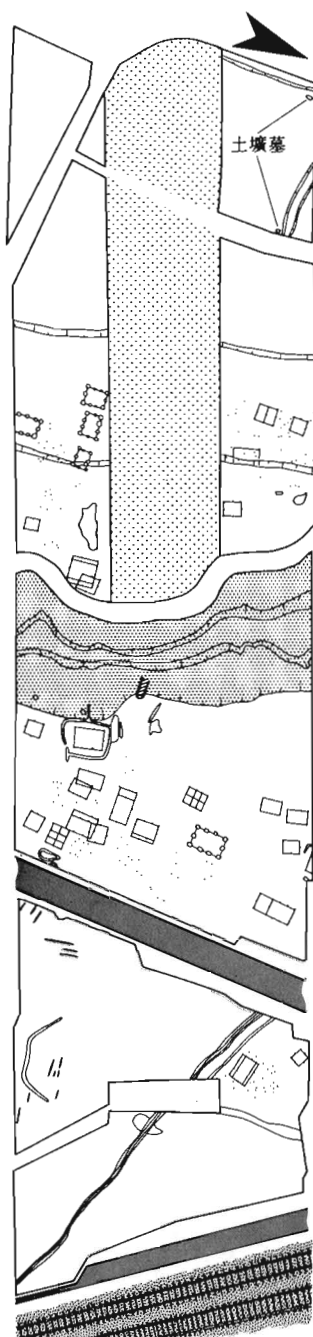
周辺の遺跡は、まだ十分な調査がなされていませんが、「日置荘」という地名は古代の部民—日置部、さらに奈良興福寺の荘園—日置荘に由来するものとされています。また、この地は河内鑄物師の本拠地であり、鎌倉時代を中心に活躍した者も多かったことが知られています。

部民(べのみ)……今から約1500年前に大和朝廷によって組織・支配された手工業にかかわる人々の集まり
荘園(しょうえん)……奈良・平安時代頃、貴族やお寺などによって開墾(かいこん)され、支配された土地
鑄物師(いもの)……鍋(なべ)や釜、あるいはお寺の鐘(かね)などの鑄物(いもの)の生産にたずさわった人々



1. 日置荘遺跡 2. 日置荘西町遺跡 3. 太井遺跡
4. 日置荘西町遺跡 5. 初芝遺跡

周辺の遺跡



- 奈良時代の建物あと
- 平安時代の建物あと
- 須恵器の焼いた窯あと
- 〰 浅い谷地形
- ... 現在調査中の部分

調査地全体図(1:1600)

遺跡のあらまし

現在までの発掘調査でわかったことを簡単に書いておきたいと思います。

まず、この地が人々と関わりをもち始めるのは、今からおおよそ1500年ほど前の古墳時代のことです。この時期のものとしては「須恵器」と呼ばれる硬い土器を焼いた窯あとをあげることができます。残念ながらここで土器を焼いていた人々の家は発見できませんでした。あるいは、少しはなれた場所からこまやかによって土器を焼いていたのかもしれませんが。

さてそれでは人々が家を作り、ここに住み始めるのはいつのことでしょうか。今回の調査で多くの建物のあとを発見しましたが、そのうちでも柱を埋めこむための穴（柱穴）が四角く、大きなものをいくつか発見しております。このような建物あとには奈良時代のものと考えられ、今からおおよそ1200年前ころのもので、ちょうど“奈良の大仏”がつくられたころにあたります。

ところで、建物では奈良時代のもの以外に今から1000年ほど前の平安時代に作られたものも多く発見しております。この時期のものは奈良時代の建物にくらべ、柱穴が小さいのが特徴です。周辺からは皿や碗などの土器がたくさん出土しています。

しかし、人々の生活のあとはこの後みられなくなり、調査区の西側で地面に穴を掘りこみ、そこに死者を埋葬した鎌倉時代の墓（土壌墓）がみついているようです。

このころ以降、人々はこの地に家を作らず、田畑となって現在にいたったものと考えられます。



発掘調査風景

すえきかまあと 須恵器窯跡

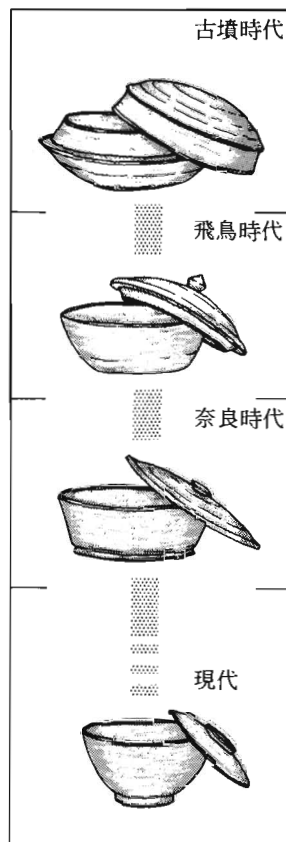
遺跡のはば中央部を南北に横断する浅い谷部分で古墳時代の須恵器を焼いた窯のあとを発見しています。須恵器とは朝鮮半島からもたらされた技術によって高い温度で焼かれた硬い土器です。

窯の上方は奈良時代に建物をつくる時にけずってしまったようで、下の模式図にある④煙道や③焼成部とよばれる部分はこわされて残っていませんでした。しかし、谷側の①焚口や⑤前庭部はかろうじて残っており、焚口には薪の“もえかす”である炭がたくさんたまっていました。

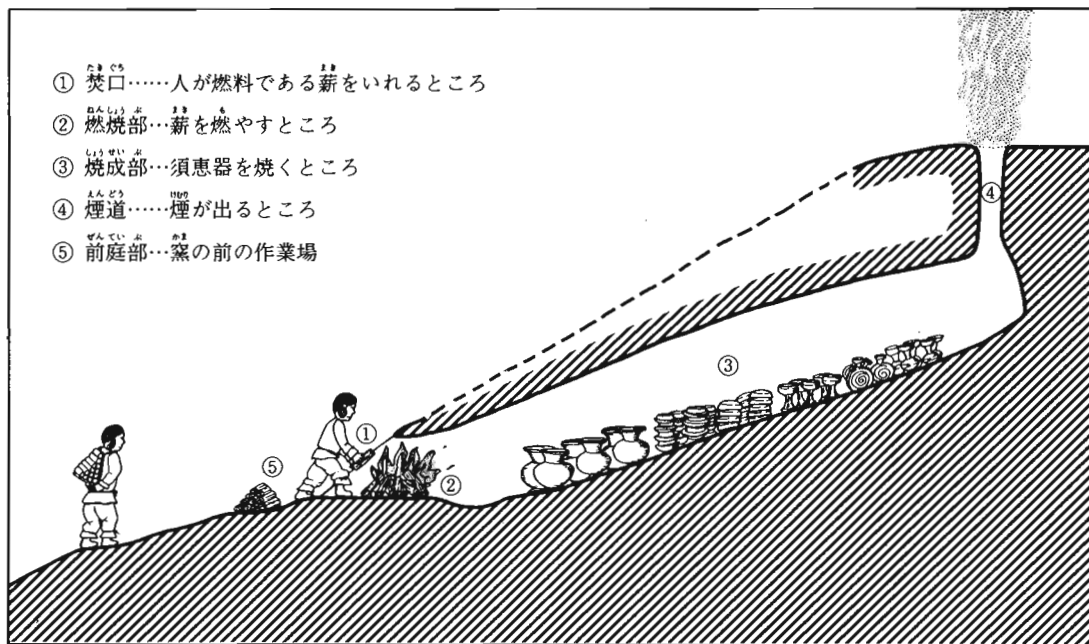
さらに⑤前庭部とよばれる部分には②燃焼部からかき出された炭とともに須恵器の破片がたくさん出土しています。これらの須恵器は焼いている途中でまがったり、くっついてしまったものや十分に焼けなかった不良品であり、製品として送りだされることなく棄てられたものです。

出土した須恵器はいままでの研究によって今からおよそ1500年ほど前の古墳時代のものであることがわかっています。

このような須恵器の窯は日置荘遺跡の南側の泉北ニュータウンや狭山池あたりに多く作られており、この付近一帯が須恵器の生産地であったことがうかがえます。



器の変化



須恵器窯の構造

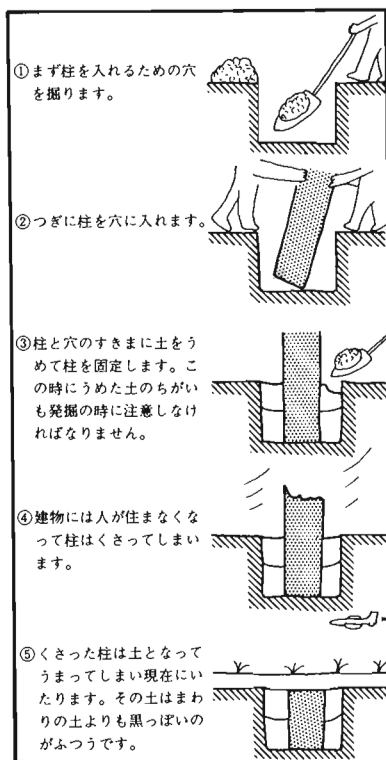
たてものぐん 建物群

日置荘遺跡（その3）で見つかった丸や四角の穴の多くは
ほったてばしらたてもの
掘立柱建物の柱穴になり、およそ30棟ほどの建物が復原され
ました。それらは大きく奈良時代と平安時代の2つの時期に
建てられたようです。

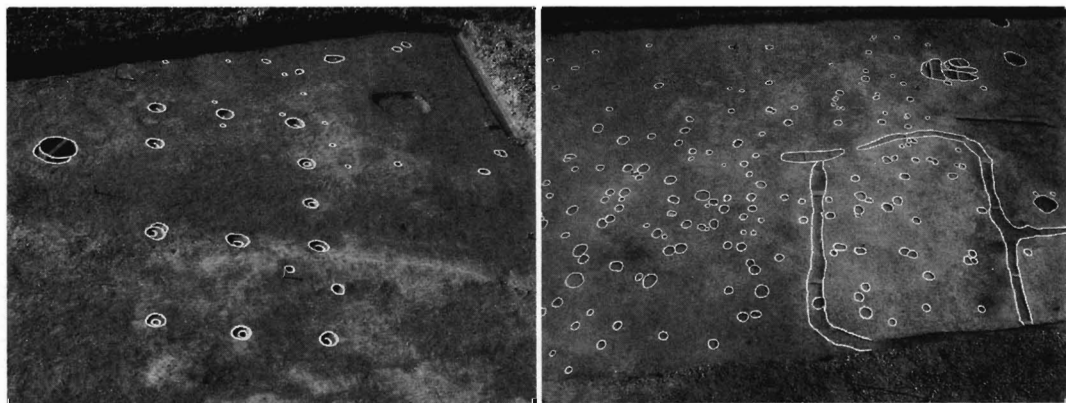
①奈良時代（およそ1200年前）：皆さんにも柱穴の中に大き
な四角いものはいくつか目につくと思います。柱穴からは土
器などは出ていませんが、周辺にみられた土器や、他遺跡で
の奈良時代建物のりっぱな柱穴の例から、これらも奈良時代
の建物跡と考えてもよいでしょう。

このような建物が今のところ4棟が見つっていますが、
それぞれ建物の方向をそろえているので、計画的に同じ時に
つくられたものと考えられます。このようにどの建物が同じ
時期に建っていたかを考えることは、村の歴史を研究する上
でとても大切なことなのです。

またこれらの建物群と同じ時期にあった、人間がほった
みぞ
や井戸はみつかりません。



掘立柱建物柱穴の歴史



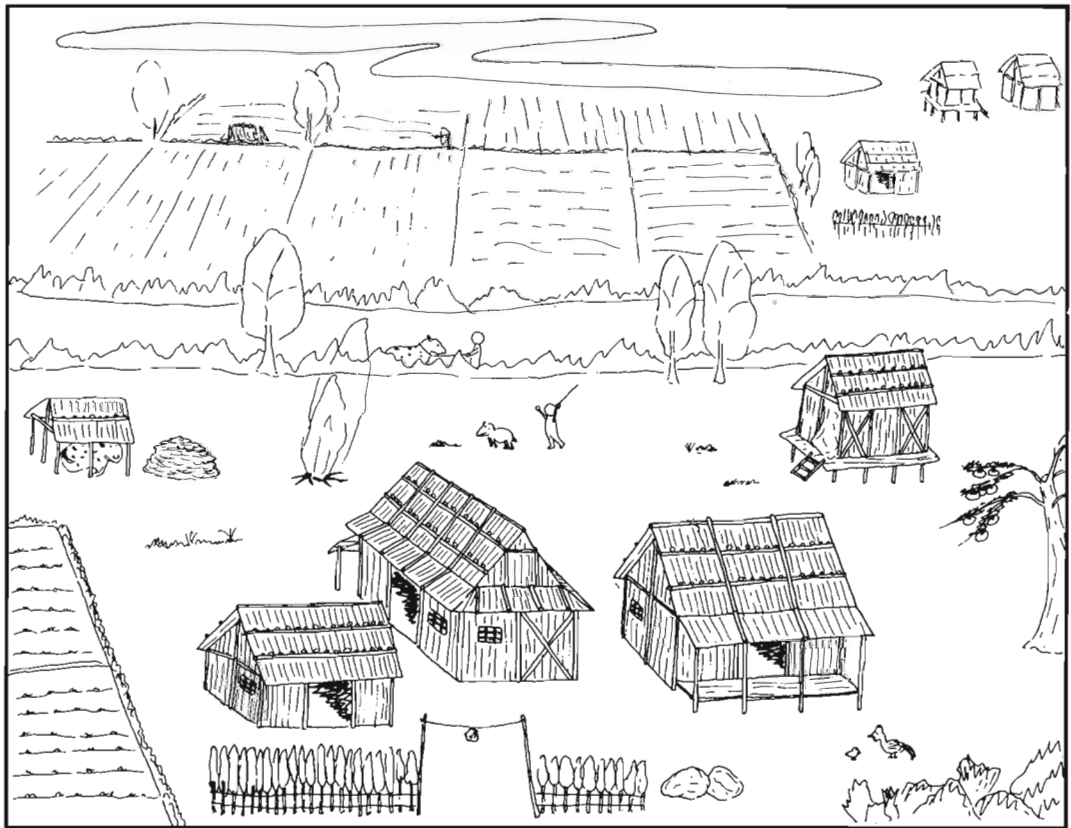
掘立柱建物跡

ほったてばしらたてもの
掘立柱建物とは・・・奈良時代や平安時代などでは、ふつう地面に穴をほってそこに柱を直接う
めるだけのかんたんな建物がつくられていますが、このような建物を考古学では掘立柱建物と呼
んでいます。寺院や宮殿では柱の下に石をおいてささえる礎石建物がつくられました。

この掘立柱建物の柱穴は上の図のようにしてつくられますが、その柱がくさってしまうと黒っ
ぱい土になったり、柱穴と柱のすきまにうめた土も一度ほりおこされたためによごれているので、
発掘調査をおこなうとその土の色のちがいから「これが柱穴だな。」ということがかんたんにわ
かるというわけです。

②平安時代（およそ1000年前）；小さくて丸い穴が多いですが、そのうち建物の柱穴となるものはすべて西暦900年代のおわりごろから1000年の中ごろの短い期間につくられた掘立柱建物跡と考えられます。そのような年代は柱穴から見つかる土器で判断しています。土器にも流行があって、その時代時代で形や作り方がちがっているので、その土器がいつつくられたものかがわかるのです。建物のあった場所を復原すると何棟かは重なってしまうので、2回以上建物が建て替えられたと見ることができます。しかしどの建物とどの建物がいっしょに建っていたかを知るのはむずかしく、建物の向きや、柱穴から出土した土器などから考えていかなばなりません。それは今検討中です。

さて、ここに住んでいた人たちはどんな生活をしていたのでしょうか。建物はせまいもの（現代で大きくても12畳ぐらい）が多く、貴族のようなくらしはしていなかったようです。彼らはおもに農業を営んでいて、田畑は建物群の周辺にあったと考えられます。おそらく下の絵のような、のどかな田園風景がひろがっていたのでしょうか。このころ都では、藤原氏が天皇の権力をおさえるほどの勢力をもっていて、地方に多くの荘園をひろげていました。日置荘が藤原氏の氏寺である興福寺の荘園であったことを考えると、これらの建物群も藤原氏に關係の深い荘園に關連する村落の一部であったかもしれません。



平安時代の村のようす

鎌倉時代の墓

今回の発掘調査によって奈良時代から平安時代にかけては人々が家を作り、生活をいとなんでいたことが明らかとなりました。

しかし、つづく鎌倉時代になると、人々はどこかに移り住んだのか、家は作られなくなります。

このように鎌倉時代には人々の生活の痕跡は消えるのですが、調査地の西端の池寄りで墓を二つ発見しております。

この墓と同じ時期の建物は南海線の線路をはさんだ東側でみつかっていますので、あるいは、そこに住んでいた人達の墓地だったのかもしれない。

発見した墓は「土壙墓」とよばれるもので地面に穴を掘り、そこに死者を葬るものです。このころにはすでに「火葬」もはじまっていますが、多くは死者を焼かずにそのまま埋葬する「土葬」だったようです。

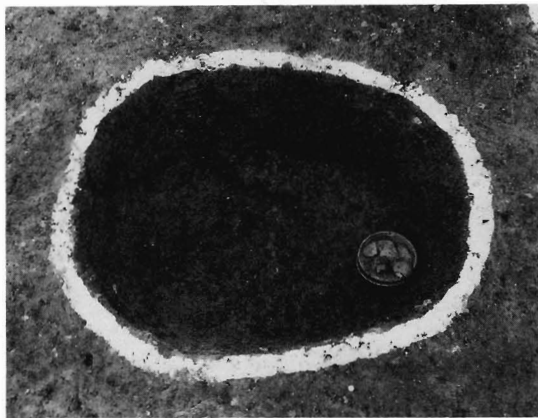
この場合、現在のような木の棺桶とともに入れられる時もあれば、布などにくるんで埋葬される時もあったようです。

右の絵は当時の墓の様子を「絵巻」などを参考に描いた想像図です。

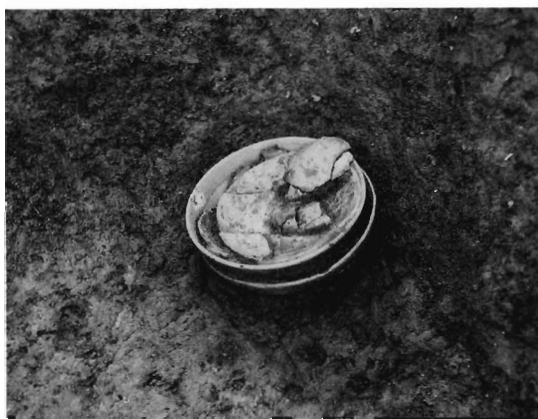
左上の方からは死者をいれた棺桶が運ばれ、それにはお坊さんがカネを鳴らしてついでいます。

また、墓地では2人の人が棺桶を入れるための穴を掘っています。

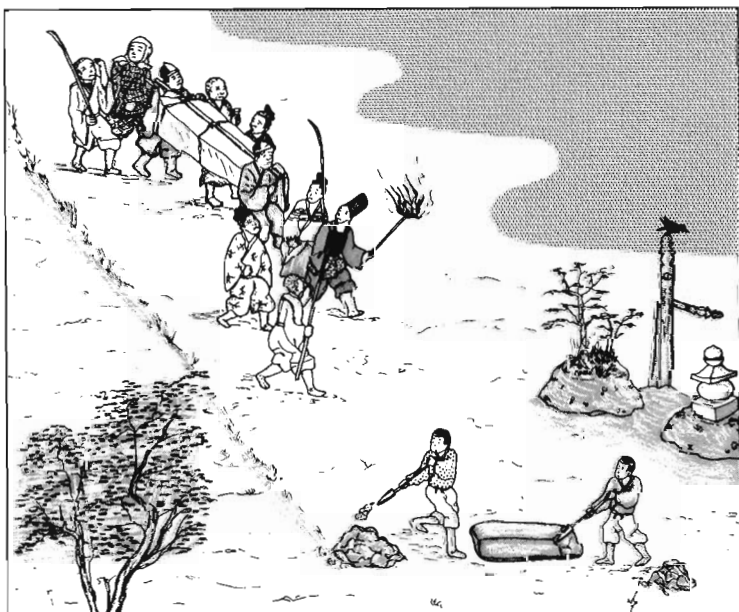
右の方にはすでに人を埋



土壙墓1



土器出土状況



中世の墓地のようす

葬した塚がみえ、「五輪塔」と呼ばれる墓石をのせたものもあります。

今回の調査で発見した墓の上には何もありませんでしたが、本来は塚のように盛り上がり、墓石なども立てられていたのかもしれません。

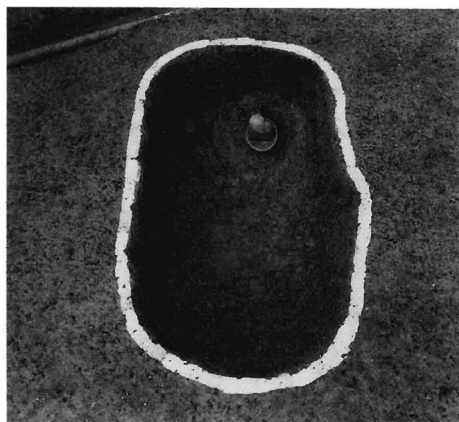
さて、当遺跡で発見した二つのお墓の注目すべきものとして、お墓の中に死者とともにいれられた土器をあげることができます。

その土器は下の写真などをみてもわかりますように、釉薬をかけた非常にきれいな碗です。このような碗は青っぽい色をしていることから「青磁碗」とよばれており、中国で作られたものであることがわかっています。

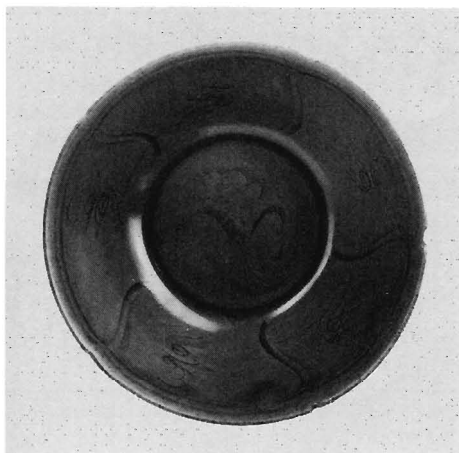
また、土壌墓のひとつでは青磁碗および土師器皿が埋めた当時のまま、しかも完全な形で出土しており、大変貴重な発見であるといえます。

今回の発掘調査では二つの土壌墓を発見したにとどまりましたが、さらに多くのお墓が周辺に存在していたのかもしれません。

左のページの図は『北野天神縁起』および『弘願本法然上人絵伝』を参考にして書いたものです。中世の墓は屋敷の近くにつくられることもあり、すべてがこのようであったとはかぎりません。



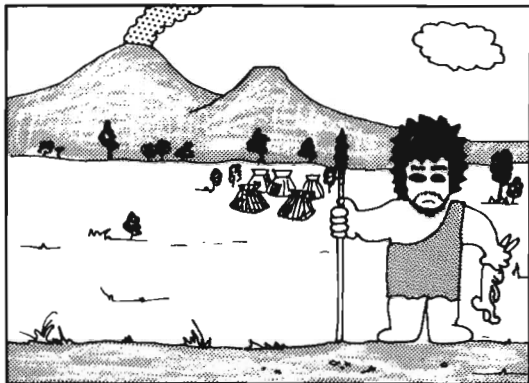
土壌墓 2



土壌墓 2 出土青磁碗



土壌墓出土青磁碗



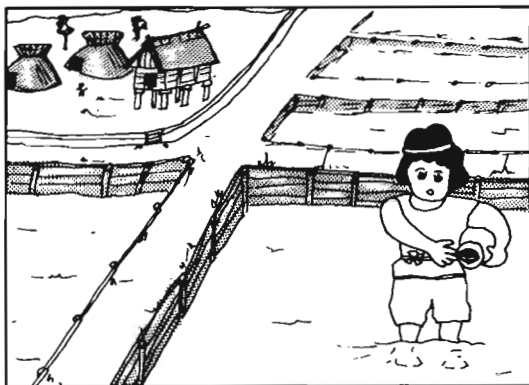
縄文時代（紀元前10～紀元前4世紀ごろ）；狩りや採集を中心に生活していました。

日置荘では？——人は住んでいなかったようですが、やじりが出土していることから、狩りの場として利用されていたと思われます。



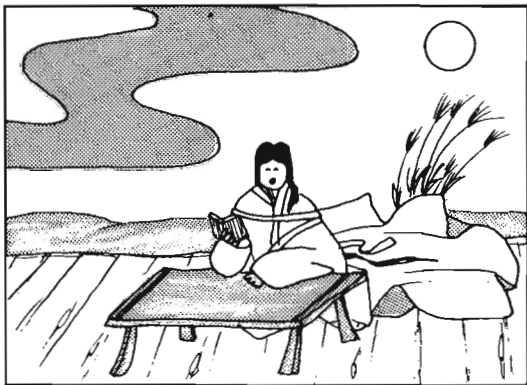
飛鳥・奈良時代（7世紀中～8世紀末）；りっぱな都がつくられるようになり、国のしくみが整いました。

日置荘では？——はじめて建物のあったことがわかるのは奈良時代のもので、このころには須恵器の窯はこわれ、中央の谷はほとんど埋まっていた。



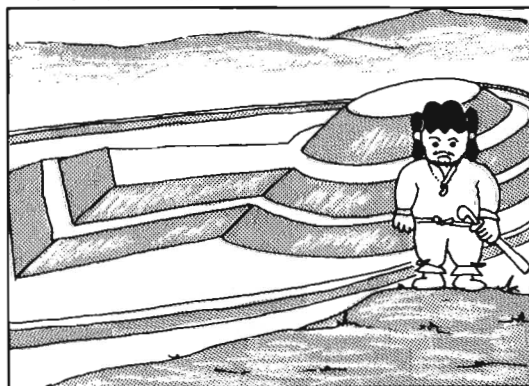
弥生時代（紀元前3～紀元後3世紀ごろ）；田んぼで稲をつくるようになりました。

日置荘では？——今のところ人が住んでいたという形跡はありません。この周辺は水を手に入れにくいので、田んぼがつけられなかったのでしょう。



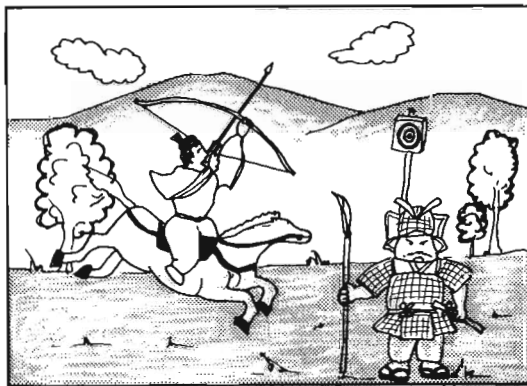
平安時代（8世紀末～12世紀末）；都では華やかな貴族生活が展開していました。

日置荘では？——もっとも多くの建物があった時代です。都の華やかさとは対照的な、のどかな農村風景でした。



古墳時代（4世紀～7世紀中ごろ）；権力をもった人が大きな墓を造るようになりました。

日置荘では？——須恵器を焼く窯がつくられました。しかし須恵器を焼く専門の職人たちは、ほかのところに住んでいたようです。



鎌倉時代（12世紀末～14世紀前半）；武士が権力をにぎるようになりました。

日置荘では？——ふたたび人が住むことはなくなりましたが、青磁碗を入れたお墓がつくられました。これ以降、田畑あるいは荒地として現在にいらいます。

世の中のうつりかわりと日置荘(その3)